



石川 康夫さん(請戸)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 中島
取材日：2月24日

体が動く限り漁師を続け、 漁業で浪江を盛り上げたい



▲請戸とご自宅を行き来する毎日の石川さん。
南相馬・道の駅にて。

お父さんの代から請戸で漁業を営んできた第8康勝丸の船長・石川さん(62歳)。

会津や米沢で避難生活を送った後、南相馬市原町区に自宅を再建されました。

現在は試験操業を行いつつ、漁業協同組合の皆さんと共に浪江の漁業再生に向けて活動されています。

◆震災当時のこと

今も鮮明に覚えています。漁業組合の集まりに行く途中に地震が起き、家族を浪江の親戚の家に避難させ、私は船で沖に避難しました。誰も経験したことのない大津波でしたから、舵を取るのに必死。あの状況では流された方を助けられなかったのは仕方がないと割り切っています。もしかしら一人くらい助けられなかったらと思うこともありません。当日は沖に避難した16隻の船と一晩中、無線で連絡を取り合いました。翌朝、全船が請戸の港に戻りました。そうしたら、何もありません。請戸漁港から歩いて5分の

場所にあった私の家も流され、一面がれきと水でした。それから4年近く避難生活を送った後、両親が落ちて着いて余生を過ごせるよう原町に家を建てました。でも本当は浪江に戻りたい。同じような事情で帰りたい方も帰れない方がたくさんおられるのではと思います。

◆漁業で浪江を盛り上げたい

今は試験操業で週1、2回漁に出ています。昨年2月に請戸漁港が再開し、26隻が帰還しました。震災前は小さい船も含めると100隻くらい。それには及びませんが、来年度の予算でもう2隻造船される予定で、「せめて30隻は」という当初の目標に近づいています。また、請戸漁港の市場も今年の4月頃に建設工事が着工する見通しです。浪江町も漁港の再開に力を入れてくれましたし、力を合わせて漁業を復興させることで、少しは町の力になれるんじゃないかと思っています。

現在、捕った魚は相馬に運び、放射能検査をした上で安全な魚を流通させていますが、ほとんどの魚種は国の定めた基準値を下回っています。元々、この辺の浜は時季ごとに捕れる魚の種類が多く、当たり前ですが、地場で水揚げされた魚はスーパーで買う魚とは味が全然違います。ただ請戸は原発に一番近い港ということで、心配なのは風評被害。どのように払拭していくかを話し合っているところです。

◆若手の漁師も頑張っています

今年1月2日には震災後初めて、出初式を行いました。若野神社の沖合でお神酒をささげ、安全と大漁をお祈りするという伝統的な儀式です。また震災前には安波祭といって、漁業組合の青年部が神輿を担いで海に入るといって毎年2月の第3日曜日にやっておりました。私も昔は若さに任せて海に飛び込んだものです。若野神社も津波で流されましたが、いずれ社を再建していただけたらと願っています。

どの地域も後継者不足の問題がありますが、請戸は若い漁師も頑張ってくれています。30代、40代、50代も頑張っているし、一番の若手は20代。分らないことは我々が教えるし、逆に教えられることもあります。漁師というのは大体みんな負けん気が強く、沖に出ればライバルだけど、団結心はすごく強い。青年部が頑張っているから、我々も頑張ろうと思えるんです。

浪江の ころ通信

●第83号●

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、町内全域に出されていた避難指示は、平成29年3月31日に「帰還困難区域」を除き解除されましたが、多くの浪江町民は福島県内外に分散して避難生活を続けています。町を取り巻く状況が徐々に変化の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

“浪江のころプロジェクト”は、町民の皆さんの声を「浪江のころ通信(※1)」を通してお届けし、皆さんの思いや暮らしぶりを発信・共有しようとするものです。

一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※2)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町と連携し「浪江のころ通信」を編集・発行しています。

※1 浪江のころ通信は、町民の皆さんがお話した「ころ」を伝えることを大切にするため、取材者が聴き取ってまとめた原稿をほぼ原文のまま掲載しています。

※2 一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のころ通信/第83号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒979-1592
双葉郡浪江町大字幾世橋字六反田7-2
「浪江のころ通信」宛
FAX.0240(34)4593

